論文要旨

装いを変える東京一極集中論

—その形成と変遷—

氏名：間てん太（商学部３年）

指導教員：長田進先生

「東京一極集中」という言葉は今でこそ人口に膾炙しているが、この言葉の定義や起源を正確に理解している者はそう多くないのではないだろうか。東京一極集中は、人口移動の側面から 1980 年代後半から顕在化した現象であり、それと同時に新聞や雑誌記事、学術論文などで議論の的となってきた。

東京一極集中に関する議論は今日に至るまで一貫して継続しているが、新聞各社の新聞記事データベース検索や、CiNii の論文検索機能による「東京一極集中」に関する該当件数は各年代により異なり、年代ごとに際立った該当件数の山を形成している様子が観察された。本稿ではこれら東京一極集中に関する議論や記述を「東京一極集中論」と呼び、その記述内容の読解を試みた。結果、東京一極集中論には新聞や学術論文の出版数の動きと連動したブームが存在することが確認され、各年代により全く異なる論点とともに記述されており、論の変遷を示していることが明らかとなった。

本論では、これら東京一極集中論のブームを、第１期、第２期、空白期、第３期と題し、各年代の東京一極集中論の内容や形成過程、そして変遷について詳細に論じる。本稿で論じられる東京一極集中論の変遷から明らかとなるのは、社会の映し鏡のように絶えず様々な社会問題と結び付けられ、批判の対象として論じられてきた東京一極集中の姿である。そしてそれこそが、従来の人口論的観点から記述される東京一極集中の「歴史」からは抜け落ちてしまう、より多角的な視点をもとに記述される東京一極集中の「歴史」である。